



平成7(1995)年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災から26年がたちました。本校の教務主任である高野 聖司(たかの せいじ)先生は、地震の発生後にボランティアに参加しました。今回の天王丘では、高野先生にそのときの経験と今の思いをつづってもらいました。



支え合いの世の中 — 阪神・淡路大震災から26年 —

地震の後、水道・電気・ガスなどのライフラインはもちろん、電車やバスなどの交通機関も止まり、町の機能は完全に停止してしまっていました。大学の授業もなく途方に暮れていた地震の翌日、たまたまラジオでボランティアを募集していることを知り、特にやることもなかったため、初めは軽い気持ちでボランティアの登録に行きました。

震災の混乱の中、いくつかの作業の手伝いをしましたが、初期の作業の大半は救援物資の搬入でした。全国各地から届く飲料水、菓子、衣類など様々な救援物資をバケツリレーで運び込む作業には全く休みがなく、当時まだ若かった自分でも体が痛くて動かなくなるくらいハードでした。それでも、トラックで次から次へと運び込まれてくる救援物資を見て、地震被害の衝撃に加えて寒さや空腹で打ちひしがれていたところを、大きく勇気づけられたのを覚えています。

その中でも、一番心に残っているのが、兵庫県のある高校のテニス部から送られてきたものです。段ボールにたくさんのおにぎりが詰め込まれていて、段ボールの外側には、「神戸のみなさん、大変でしょうけどがんばってください。神戸の街の一日も早い復興を心よりお祈りしています。」という内容のメッセージが書かれていました。どの救援物資も当然うれしかったのですが、そのメッセージを見たときは、涙がこみ上げてくるのが止まりませんでした。多くの被害を出した災害の中で、自分の命が助かったことだけでなく、たくさんの人に支えられていることを感じる事ができて、本当に幸せな気持ちになりました。

6400人余りの犠牲者を出した阪神・淡路大震災は、東日本大震災が発生するまで戦後最大といわれていた大災害ですが、これをきっかけにボランティアとして活動することが注目され、阪神淡路大震災の起きた1995年が、日本のボランティア元年と言われるようになりました。都市化が進み、人と人との関わり合いが少なくなってきた現代ですが、まだまだ世の中捨てたもんじゃない、人の温かさを強く感じられる出来事ではないかと思います。

わたしたちは誰もが、周りの多くの人に支えられて生きています。そのことに感謝する気持ちを忘れないようにしたいと思います。また、困っている人に対して、自分にできることを進んでしてあげられる人間でありたいと思います。



2000年に公開された映画「ペイ・フォワード」を見て、この思いがさらに強くなりました。ペイ・フォワードとは、日本語では「恩送り」と訳されます。

— 人から受けた厚意(親切)を、その相手に返すのではなく、『次へ渡す』こと。 —

人は他人から厚意を受けた場合、その相手にお返しをしようと思いますが、そうすると、その厚意は当事者間のみで完結して終わってしまいます。しかし、この“厚意”を受けた相手に返すのではなく、次の人に別な形で『渡して』みたらどうなるか?それを、1人の人が別の新たな3人に『渡して』いったとしたら・・・という内容の映画です。自分にできることは僅(わず)かなことかもしれないが、それが周りの人々を癒し、さらに広がっていくことで世界が少しずつ変わっていくとなると、とても意味のある大切なことだと考えさせられます。

私自身も、できることはそれほど多くはありませんが、少しでも役に立てたらと思い、骨髄バンクに登録したり、献血をしたりしています。運転時、対向の右折車や横断したい歩行者を見かけたき「お先にどうぞ」と道を譲る。電車の中で高齢者や体の不自由な人に席を譲る。あえて困っている人を探さなくても、たまたま困っている人と出会った時、できる範囲のことで助けてあげれば十分かもしれません。どんなことでも、相手に見返りを求めずにできることがあると、みんなが幸せな気持ちになれると思います。

大切なお知らせ

3学期が始まり、子どもたちは寒さに負けず元気に過ごしていますが、県の新型コロナウイルスの警戒レベルが感染拡大防止対策期に引き上げられました。そこで、学校では国のガイドラインに沿って、感染拡大防止の観点から、児童本人のみならず、同居の家族に風邪症状が見られ、児童の出席を見合わせる場合は、欠席とせず「出席停止」で対応することにしたのでお知らせします。

保護者の皆様におかれましては、児童の登校について毎朝の健康観察などにご協力いただいているところですが、同居のご家族の状況も判断の対象にしていただきますようお願いいたします。